

## 歴史点描 38 江戸末期の南海トラフ地震と網干 その2

今年8月8日、気象庁より「南海トラフ地震臨時情報(巨大地震注意)」が出されました。南海トラフ地震については、マグニチュード8~9クラスの地震の30年以内の発生確率が70~80%(2020年1月24日時点、国土交通省「国土交通白書2020」といわれています。今回は、『網干町史』に記載されている史料から、江戸時代末期・安政元(嘉永7、1854)年11月4日、翌5日に起きた南海トラフ地震で大きな被害があった網干新在家村塩浜の状況を見ていきます。

嘉永7年11月、新在家村・米屋彌一郎は龍野藩奉行に「龍野表見分願出」を提出しています。そこには、こう書かれています。「今般の稀な地震で、新在家村塩田にいたんだところがあります。・・・御運上銀(租税)3ヶ年半、免除していただきありがとうございます。・・・私が持っている浜では、無事な場所はありません。すべての浜の普請に取り掛かるための費用のやりくりは難しく、そのまま荒れ浜になっています。どうしたらいいかわからず、逼迫しており、両親妻子を養うもとなる家業から離れたら、ほかに養育するための収入もなく、行く末はどうなることかと心身わずらっています。日雇い稼ぎも日々数十人入り込んでおり、ともに困っています。・・・普請入用御手当として、御米20石(約3000kg)の拝借をお願いします。5か年以内で返済します。」この史料から、塩浜の被害や人々の今後の暮らしに対する当惑がみえてきます。

月日は流れ、震災から13年あまりたった慶応4(1868)年正月、網干新在家村浜庄屋圓尾六郎兵衛から大庄屋片岡徳太郎に差し出された願書には、「当塩浜稼ぎのものどもは、おかげをもって、渡世を続けられ、」との記述があり、塩浜持主より銀300枚の藩主への献上を申し出ています。そののち、六郎兵衛らが役所へ献金を持参しており、このことより、少なくとも慶応4年ごろまでには、新在家村の塩浜が復興したものと思われる。

現在、塩田跡の一部は、公園・遊歩道となっており、春は桜が咲き誇ります。

網干歴史講座会員 垣内 小林淳子



播州網干港塩田眺望 (大正時代)  
有本浩二氏所蔵



新在家問屋川緑道公園  
塩田鎮守神大黒祠跡碑と遊歩道